

ワーグナーのもう一つの喜劇

恋愛禁制

2022/07/01



ここに、オペラファンのみなさまに、ワーグナーの知られざる名作歌劇《恋愛禁制》をご紹介できるのは、わたしにとって最大の喜びとするところであります。これは、名うてのワグネリアンには新しい天体の発見であり、ワーグナー嫌いな方には、新しい「イタリア風オペラ・ブッフア」の誕生とあっていいものだからです。



多額の借金と大いなる屈辱

歌劇《恋愛禁制》は若きワーグナーが 23 歳のときに書いた初めてのオペラらしいオペラです。《妖精》（1834 年に完成・21 歳）につづく第 2 作目のオペラですがそのあとの《リエンチ》（1840。27 歳）が大成功を納めたので長く忘れられたままでした。このとき、ワーグナーは、ドイツの小都市マグデブルクのベートマン劇団の楽長として雇われたのをいいことに、この楽団を使って自作を上演しようと思ったのです。原作がシェイクスピアの喜劇ですから面白くないわけではないのですが、初演は大失敗でした。練習は 10 日間しかなく、歌手たちも、報酬はまともにもらえなかったので歌詞を暗記しようともせず、本番では即興で勝手な台詞を叫んでいて、オーケストラもやけになって大きな音を出す始末。聴衆はなにがなにやらわからないままで帰って行きました。その二日後の第 2 回公演はワーグナーの出費で行われましたがお客はだれもこず、出演者たちどうして喧嘩も始まり、これまた、なにがなにやらわからないままに終わりました。そのときワーグナーに残ったのは多額の借金と大いなる屈辱でした。

ワグネリアン必見

初演の前に、ワーグナーは警察に呼ばれて、「《恋愛禁制》という題は軽薄だから、《パレルモの修道尼》に代えること」と命じられました。いまではそれが副題になっています。ワーグナー自嘲の「失敗作」ですが、今回、初めてオランダ国立歌劇場が映像化しました。さあ、どんな失敗作か、怖い物見たさで覗いてみましょう。でも、物語はシェイクスピアの原作よりもよく出来ていて、分かりやすく面白く、演劇作法や音楽の構成もしっかりしていて、なかなか魅力的な傑作です。もう一つの大作喜劇歌劇《ニュルンベルク

のマイスターシンガー》には敵わないものの、もう一つのワーグネリアン必見の喜劇歌劇です。あなたに新しいワーグナーの世界が開けます。NHKの土曜講座で採り上げることになっています。ご期待を。

《恋愛禁制》の物語

ここは、16世紀のオーストリア支配下にある都市パレルモ（シチリア島）です。支配者の新教徒（清教徒：ピューリタン）の禁欲的な考え方と南イタリア（といってもまだこのころはイタリアという国はありませんでした）のカトリック教徒の、性格は温厚で気候は温暖で国際的な港町の快楽的で寛容で慈悲深い考え方とは、水と油・月とすっぽん・不倶戴天・犬猿の仲・氷炭（ひょうたん）相容れぬ・呉越同舟・反（そ）りが合わない・平行線をたどる・角突き合わせる仲でした。なにかことがあると、両者それぞれの主張を盾に、支配者と民衆の衝突が繰り返されています。ここでは、問題を抱えたそれぞれ四組の男女がそれぞれの愛のために主義主張を守りながら、宗教的な偏見と政治的な圧政と闘います。その四組とは、総督フリードリヒと元婚約者マリアナ、パレルモの若い紳士クラウディオと許婚のユーリア、修道尼見習いイザベッラと放蕩者ルツィオ、警察所長ブリゲーラと酒場の女給ドレッラの四つのカップルです。喜劇らしく、最後には、四者それぞれに愛しあってハッピーエンドで終わります。

イタリアとドイツ両国の「オペラの技法」を駆使

むろんここには、「楽劇」の萌芽と言ったものはまだありません。それは、イタリアのベルカント・オペラでもあり、オペラ・ブッフアでもあり、同時に、ウエーバーの《魔弾の射手》の延長にある新しい「ドイツ・ロマン派オペラ」でもあるのです。例えば、アリアの数々です。イザベッラは、死刑を宣告された弟の命を助けるために、ここを先途と、一生懸命に総督フリードリヒに嘆願します。ここでイザベッラが歌うのは、このオペラ屈指のアリアです。イタリアのベルカント・オペラのアリアのように、とても美しくやさしい「抒情歌」（カヴァティーナ）です。そのあとにつづくカバレッタの勇ましさは無類で、それを支えるオーケストレーションも表現ゆたかで多彩です。ワーグナーはもう完全に、イタリアとドイツ両国の「オペラの技法」を手中に納めて、天才的に駆使しています。

早熟なオペラ作曲家ワーグナー

言わずもがなですが、23歳のワーグナーがこの《恋愛禁制》を書いた1836年に、同年生まれのヴェルディ（1813-1901）はまだオペラを一作も書いていません。ヴェルディの第1作とされる《サン・ボニファッチョ伯爵オベルト》が初演されたのが1839年（26歳）、出世作の《ナブッコ》が初演されたのが1842年（29歳）です。因みに、ロッシーニ（1792-1868）がオペラ作曲家としてデビューしたのは一幕のオペラ・ファルサ《結婚手形》です。初演は1810年、18歳のときでした。これはまた早熟ですね。



自業自得

このオペラの原作はシェイクスピアの喜劇『尺には尺を』です。変な題ですが、元々は聖書の「マタイ伝」の第7章第1節と第2節の「人をさばくな。自分がさばかれないためである。あなたがたがさばくそのさばきで、自分もさばかれ、あなたがたの量るそのはかりで、自分にも量りが与えられるであろう」 "Judge not, that you be not judged. For with the judgment you pronounce you will be judged and the measure you give will be the measure you get" (Matthew 7.1 and 7.2). からとられたものです。ざっと訳せば、「自業自得」のことだといっているでしょう。



シェイクスピアの問題劇

このシェイクスピアの戯曲は喜劇です。でも、喜劇にしては内容がおぞましく、悲劇的な箇所が多いので昔から、暗い精神的なドラマと直截的な喜劇の要素が混乱して現れる「問題劇」(Problem play)として批判されています。誠にその通りで、ところが、さすがワーグナー、この問題劇『尺には尺を』の問題点を見事に解決して、本来の「喜劇」としてオペラ化しました。パレルモの総督フリードリヒが作ったその法律が恋愛を禁止したものであったので、ワーグナーは、このシェイクスピアの『尺には尺を』をオペラ化するに当たり「恋愛禁制」(Das Liebesverbot)としました。

セックス・ネゴシエーション

パレルモの総督フリードリヒは、領主からその代理を任されたのをいいことに、厳格な清教徒の信念から、このパレルモを善人の街、正義の街、道徳観にあふれた街にしようと思いました。新しい法律を施行して、愛に乱雑なパレルモの人たちをどんどん逮捕します。ときには死刑をも科しました。放埒(ほうらつ)な愛のために死刑を宣言された弟を助けようと姉の修道尼が嘆願にきます。その姉の純真な姿に邪心を抱いたフリードリヒは、「わしの情欲を満足させてくれたら弟を助けてやろう」と「セックス・ネゴシエーション」(性のとりひき)を持ちかけます。シェイクスピアの原作でのこの口説きの長いシーンは、なんとも暗くて、陰惨で、暴力的です。総督は、演劇的な「迫真の演技」で、弱みをもつ情け深い娘に迫るのです。この演劇的なリアルさに私たちは辟易して、どうしてもこの喜劇『尺には尺を』を好きになることは出来ません。しかし、いまなら、ワーグナーのオペラ《恋愛禁制》に避難することは出来ます。

オペラが好き

《恋愛禁制》の結末は衝撃的です。総督フリードリヒはだまされたとも知らず、イザベッラだと思って元の婚約者マリアナとベッドを共にします。これが悪名高き「ベッド・トリック」(ベッドの上で相手が入れ替わる)の手法です。みだりに女と遊んだとして、総督フリードリヒが自らが「恋愛禁制法」によって市民から糾弾されます。支配者のドイツ人であり、あくまでも清教徒のフリードリヒは、「法律に従って私を裁くがいい」と覚悟します。さすが筋金入りのピューリタンで、ここで最後に見事な「ノブレス・オブリージュ」(仏 noblesse oblige : 貴族の誇り)振りを見せてくれます。パレルモの人々は、「法律が悪いのであってその愛の行いは正当だ」とフリードリヒを許します。めでたし、めでたしです。ここに、シェイクスピアの高圧的な怒声と傍若無人な乱暴さからなる「攻撃的な言葉と演技のリアルな異質者排斥演劇」と、どこか浮世離れたワーグナーの「みんなで声をそろえて友情を歌う融和オペラ」の違いがあります。それで私たちは、オペラが好きなのです。

天道是か非か

当然、この《恋愛禁制》を論じるときには、シェイクスピアが『尺には尺を』で提起した「社会における正義」について、モンテスキュー(1689-1777)

の『法の精神』(1748)とルソー(1712-1778)の『社会契約論』(1762)に言及すべきでしょう。でも、私はここであえて司馬遷(紀元前145-86)の書いた『史記』を持ち出したいのです。司馬遷の『史記』は、最も古い時代にあつて「天道、是か非か」という難題を問いつづけてきた書だからです。ここでいう「天道」とは、「法律を実施する皇帝や王さま」のことです。『尺には尺を』の公爵のことです。

酷吏(こくり)

ご存知、『史記』(紀元前91年頃)は「紀伝体」の歴史書なので、「紀：本紀」(皇帝や王などの支配者に関する出来事を年毎に記述)で始まり「伝：列伝」(国に仕えた官僚を中心に個々の有名な人物の一生を記述)で終わります。司馬遷は、「天道是か非か」を問うに当たって、『列伝』のなかの第六十二編に『酷吏列伝』としてこの問題をまとめました。社会において正義を実施する「酷吏」を主人公にした物語集です。「酷吏」(こくり)とは、人民に対して無慈悲な行いをする「官吏」(かんり)のことであり、人の幸せよりも「法」(天子の意向)を重んずる冷酷非情な官僚のことです。『尺には尺を』での酷吏はアンジェロのことであり、『恋愛禁制』ではフリードリヒと警察署長ブリゲールのことです。

この『酷吏列伝』の冒頭には、例によって「太史公(司馬遷)自序」が付けられています。そこには次のように書かれています。(小川環樹他訳『史記列伝』岩波文庫)

人民が根本の業である農作のいそしみからはずれて偽りが多くなり、混乱をまきおこし法を手玉にとるようになると、善良な統治者では、かれらを教化することはできなくなり、ただ苛烈な強圧策だけが、一応の統制を保ちうることとなるのである。ゆえに酷吏列伝第六十二を作る 一太史公自序。

つづいて、酷吏に関する孔子の批判的な考えが説かれています。

法律によって指導し、刑罰によりで統制すると、民は少しでも裏をくぐろうとして、恥ずる気持をもたない。徳によって指導し、礼によって統制すると、恥ずることを知り、正しい道をふみおこなう。

訴訟を裁決する能力では、わたしは普通の人と同じくらいだろう。それよりわたしはぜひとも訴訟というものをなくしてしまいたいのだ。

肝心なのは道と徳

『酷吏列伝』は、また次のように述べています。

法律禁令というものは、統治のための道具ではあっても、正と邪を裁定したり直したりする根元ではない。かつては、秦の法の網は天下にくまなく張りめぐらされていた。しかし姦邪欺瞞はわきおこり、その極点では、上も下もみな法の目をくぐり、收拾しがたい状態にたちいたった。その当時、司法官たちがその職責をはたそうとすることは、あたかも燃えさかる火を消そうとしたり沸きたった湯をおろそうとするようなものであつて、勇敢で冷酷

な人間のみが、その任務を遂行して心の満足を味わうことができたのである。道とか徳とかを問題にする者は、その職責の深みに沈みこんで動きがとれなくなってしまったのであった。

ところが、漢の始めは、角ぼったものをこわしで円くし、飾りを取りさって素朴にしたため、法律の網の目は舟を呑みこむほどの大魚でも捕えそこねるくらいであった。しかし司法官たちの仕事は誠実で暖かみがあり、悪事に走ることなく、人民の生活は落ちついて安らかであった。肝要なのは道や徳なのであって、法律とか禁令なのではない。

マムシや鷹

結局、司馬遷はこの『酷吏列伝』で 11 人の酷吏を取りあげて、その残酷苛烈で冷酷非情さを紹介してます。読んでいても大変におぞましい感じがして、読み終えるのに我慢と辛抱がいります。『尺には尺を』のアンジェロなど、その比ではありません。司馬遷自身も、最後に、

太史公曰く、勝手気ままに磔（はりつけ）の刑にしたり、首をのこぎりで引いたり、槌で叩いて無実の罪を告白させたり、賄賂で手心を加えた酷吏たち、マムシとか鷹などとあだ名された酷吏といったやからは、いったい、いちいちとりあげる必要があるか。とりあげる必要があるか。

— と珍しく終わりの文言を繰り返しながら嘆いています。でも、司馬遷は、『史記』の主題が「天道、是か非か」である以上、酷吏の実体をいちいちとりあげて述べざるを得なかったのです。

私たちがシェイクスピアに同情するのも、故なしとしません。

